東南アジア研究　45巻３号　2007年12月

ミャンマー周縁部における種子ビーズ利用の文化
―― その継承と創出をめぐって ――

落　合　雪　野*

Conservation and Creation of Plant-using Culture: A Note on Seed Beads of Job's Tears on the Periphery of Myanmar

Ochiai Yukino*

In this paper, I focus on the grass plant group Job's tears (*Coix*) to discuss people-plant interaction on the periphery of Myanmar. The field observations and interviews indicate that the wild and cultivated plants of Job's tears are recognized as a resource providing food, medicine, and seed beads. Ethnic groups belonging to different linguistic categories share a common culture of using the Job's tears plant. In particular, the seed beads have played a unique role in their material culture; they are used as toys and tools for rituals and ceremonies, as well as for body decoration in beautiful and striking combinations.

In recent years, however, the use of the seed beads has changed considerably. The entire process is now carried out by different seed collectors, product makers, and product users as seed bead products have entered the trade as souvenir handicrafts for tourists. Non-minority apparel makers have also started to produce new seed bead products for local sale using seeds obtained from ethnic minorities. In conclusion, the seed beads of the Job's tears plants can serve as an indicator of socioeconomic change and human relations in a multiethnic society on the periphery of Myanmar.

Keywords: Job's tears, Myanmar, ethnic minorities, useful plants, seed beads, commercialization
キーワード：ジュズダマ属，ミャンマー，少数民族，有用植物，種子ビーズ，商品化

I　は　じ　め　に

ジュズダマ属はイネ科に属する多年生，雌雄同株の草本で，野生種４種３変種と栽培型の亜種ハトムギからなる［Bor 1960; Koyama 1987］。ジュズダマ属がインド，ミャンマー（ビルマ）周辺の有用植物であることを最初に記した文献は，おそらく Watt［1904］であろう。そこには，当時インド中央平原，アッサム，ペグー，アラカン，テナセリウム，シャンなどで種子の形態的特徴の異なるジュズダマ属がみつかり，それが食物，薬，装飾など多くの目的で用いら

* 鹿児島大学総合研究博物館；The Kagoshima University Museum, 1-21-30 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan
e-mail: yukino@kaum.kagoshima-u.ac.jp

れていたことが記録されている。その後，おもにインド北東部でジュズダマ属植物に関する研究が進められ，民族誌に記録されたり［Hutton 1968; 1969; Mills 1973; 1980］，民族植物学の報告がまとめられたりしてきた［Jain and Banerjee 1974; Arora 1977］。

では，インド北東部と同じくその分布地にあたるミャンマーでは，どのジュズダマ属がどのように利用されてきたのだろうか。この現状の一端として，少数民族やその民族衣装をあつかった文献［Diran 1999; Howard 1999; Dell and Dudley 2003］に，ジュズダマ属の種子がビーズとして衣服やアクセサリーを飾っている様子が確認できる。だが，そこでは民族衣装や染織に主眼が置かれていて，ジュズダマ属そのものに関する情報は少なく，ものをつくるに至った人と植物の関係を知ることはできない。

このような背景のもと，2001 年から 2006 年にかけてミャンマー周縁部の少数民族と呼ばれる人々を主たる対象に現地調査をおこない，植物の実物を元にした聞き取りと植物を加工してつくられたもの資料のコレクションを実施した。この現地調査の目的は，人々に共有される有用植物としてジュズダマ属の利用を位置づけ，さらには，その利用にかかわる文化がいかに継承されあるいは変容しているかをあきらかにすることにある。とりわけ，人と植物のかかわりのあり方をしめす実物としてもの資料を重視し，資料自体が持つ性質と資料が収集された状況を精査する。これにより「地域認識の個別ツール」［井上 1999］として民族植物学の手法を応用し，もの資料に立脚した地域の動態理解を試みる。

以下では，まず現地調査の概略を説明した後，ジュズダマ属利用の全体像を俯瞰し，多くの民族集団が日常生活に役立ててきた状況を確認する。次にその中から種子をビーズとして使う用途に焦点をあて，住民によって継承されてきた知識や実践を紹介する。この内容はすでに落合［2007a; 2007b］で報告したが，比較のために再度記述する。そのうえで，継承されてきた文化を基盤に実践が変化し，あるいは新たな利用法が創出される状況，さらにはものが商品化され，その流通ネットワークが形成される過程を検証する。

II　調査地と調査方法

現地調査は大きく二つの時期に分けられる。前半の 2001 年 2 月から 2003 年 12 月にかけては，ミャンマー中央農業研究所の遺伝資源探索事業の一部として，あるいはミャンマー林業大学やミャンマー農業大学による調査許可を得て，カレン州パアン，シャン州北部ラショウ，ナムトゥー，クッカイ，ムセー，ナムカム，バゴー管区オクトウィンの農村で農林業の専門家とともに延べ 28 日間の調査をした。後半の 2005 年 1 月から 2006 年 12 月にかけては，観光ビザを得て，シャン州東部チェントン，タチレクと南部タウンジー，ニャウンシュエ，カロー，マンダレー管区マンダレー，カチン州バモー，ミッチーナ，チン州ミンダット，カンペットレッ

ト，サガイン管区レシーの観光許可があたえられた地域に観光ガイドとともに出かけ，延べ61日間にわたって観察や聞き取りをおこなった。

それぞれの調査地ではまず，野外で生育中のジュズダマ属植物，保管されていたその種子や加工品を観察した。その上で，このような植物の実物にもとづいて利用の当事者である住民に呼称，由来，利用法，栽培法などについて，ビルマ語（一部シャン語，カチン語）通訳を介して聞き取りをおこなった。さらに持ち主の許可を得て，植物資料，もの資料，映像資料を収集した。ただし，過去に利用の経験があっても住民の手元に植物や種子，加工品が現存しない場合には，日本から持参した種子サンプルを提示し，その人が言及している植物がどの種類に当たるのかを確認しながら同様の聞き取りをおこなった。

III　利用の全体像

表1は，ジュズダマ属の利用や認識について調査の結果を集約したものである。まず誰が利用するのかについて，住民の自称する民族集団を新谷［1998］をもとに言語集団別にまとめてみると，言語学的な系統関係の異なる複数の民族集団，タイ諸語系，チベット・ビルマ諸語系，カレン諸語系，モン・クメール諸語系，漢語系の人々がその担い手になっていた。しかも，利用者の居住地はミャンマー周縁部の広範囲にわたっていた。

次に植物の種類について，本調査で観察，収集できた資料をBor［1960］とKoyama［1987］にしたがって分類すると，ジュズダマ（*C. lacryma-jobi* var. *lacryma-jobi*），モニリファ変種（*C. lacryma-jobi* var. *monilifer*），ステノカルパ変種（*C. lacryma-jobi* var. *stenocarpa*），プエラルム種（*C. puellarum*），ギガンティア種（*C. gigantea*），ハトムギ（*C. lacryma-jobi* subsp. *ma-yuen*）の3種1亜種3変種となった。つまり，ジュズダマ属4種1亜種3変種のうち，アクアティカ種（*C. aquatica*）をのぞくすべての種類が，何らかの形で認識され，利用されていたのである。

住民がジュズダマ属を手に入れる方法には，野生植物を採集する，野生植物を採集し栽培する，野生植物を栽培する，栽培植物を栽培する，の4通りがある［落合2007b］。このうち，野生植物を採集する方法でのみ入手されていたのはギガンティア種，栽培植物を栽培する方法でのみ入手されていたのはハトムギである。ジュズダマ，モニリファ変種，ステノカルパ変種，プエラルム種の4種類については，採集と栽培の両方がとられていた。ジュズダマ属の生態的特性として，攪乱を受けやすい環境に生育する人里植物［長田1973］としての性格を備えており，居住地や耕地など人の生活空間に生えることが多い。それゆえに野生集団が人の目にとまりやすく，栽培しようと思えば比較的容易に耕地環境に持ち込むこともできる。この4種類は野生植物として記載されており［Bor 1960］，本来自然環境に見つかるものだが，それを意識的

表 1　ジュズダマ属利用の全体像

民族集団	食用	薬用（効果が期待される症状）	ビーズ（製品）		
			玩具	宗教，儀礼，呪術	身体装飾
タイ諸語					
タイ・クン	MA*			L（仏具）	
タイ・マオ	MA	L（風邪）		L（仏具）	
シャン	MA	L, P（腎臓病，泌尿器系疾患）		L（仏具）	S（バッグ）
タイ・ルー	MA		L	L（数珠，仏具）	
タイ・ローン	MA	L（泌尿器系疾患）	L	L（数珠，仏具）	L（ターバン，上着）
チベット・ビルマ諸語					
ラフ	MA		L		
リス	MA		L		
アカ	MA	L（発熱，出産時のダメージ）			L, M, S, P（衣服，バッグなど）
アク	MA				L, S, P（衣服，アクセサリー）
ビルマ		L（糖尿病）		L（数珠）	
ダヌ	MA		L	L（稲作儀礼，お守り）	
タウンヨウ	MA				S（ワンピース）
インダー		G（外傷）			
ロンウォー	MA				S（バッグ，ベルト，帽子）
ツァイワ				S（バッグ）	
ジンポー		L, MA（湿疹）	L		S, P（バッグ）
ラチェ	MA	MA（疲労）			
カチン	MA	L（糖尿病）			S（バッグ）
ムン・チン	MA			L（お守り，よだれ止め）	L（首飾り）
ファラム・チン		L	L	L（舞踏用帽子）	
シム・チン	MA				L（首飾り）
ダイ・チン	MA				S（首飾り）
マトゥビ・チン					L, S（首飾り）
インドゥー・チン	MA		L		L（首飾り）
ウプ・チン	MA				
ガラ・チン	MA				L（首飾り）
ダイドゥー・チン	MA				
タンクル・ナガ	MA			S（帽子）	
マクリ・ナガ	MA			L,S（ベルト，ブランケット）	
ロンブリ・ナガ				L, S（たすき）	
パラ・ナガ	MA			L（お守り，よだれ止め） MA（安楽死に導く）	
コキ・ナガ	MA				L（ブランケット）
カレン諸語					
カレン（モン州）			L		
カレン（バゴー管区）	MA				S（ブラウス）
パオ（モン州）		L（糖尿病）	L		
パオ（シャン州）	MA		L	L, S（お守り）	S（ターバン）
ラター	MA				M, P（腰飾り，額飾り）
モン・クメール諸語					
パラウン	MA	L（皮膚病）		M（数珠）	S（ターバン）
ワ	MA				S（バッグ）
ラー			L		
エン	MA	L（黄疸）	L		L, S（アクセサリー）
漢語系					
雲南人		L（発熱）	L		

* ジュズダマ属の種類を示す。MA: ハトムギ，L: ジュズダマ，M: モニリファ変種，S: ステノカルパ変種，P: プエラルム種，G: ギガンティア種

に栽培する行為には，確実に利用しようとする住民の意思が反映している。また，ジュズダマ属のドメスティケーションを考えるとき，栽培植物のハトムギは穎果を包む殻（総苞）が薄く，割れやすいのに対し，その祖先野生種であるジュズダマは殻が厚く，割れにくいというように，あきらかな形質の変化が認められる。同様に，栽培下におかれたジュズダマ属の野生植物4種類にも形質に変化が生じている可能性があり，また一部のステノカルパ変種にはそのような事実も認められるが［落合2007b］，現時点では栽培植物として明らかに区別されうるものとはなっていない。

最後に用途とその部位について，ジュズダマ属の用途は食用，薬用，ビーズ用に大きく分けられる。食用にする場合にはハトムギの穎果の内側の内胚乳でんぷんが，薬用にする場合はおもにジュズダマの植物体全体が，ビーズとして利用する場合にはハトムギを除く野生植物の殻が，それぞれ利用の対象となっている。つまり，住民は複数の種類のジュズダマ属の異なった部位に用途を見出し，日常生活のさまざまな場面に活かしているのである。

IV　継承される利用法

ジュズダマ属の利用全体のうち，ジュズダマ，モニリファ変種，ステノカルパ変種，プエラルム種の種子がビーズとして用いられる場合に焦点をあて，世帯や集落で継承されてきた利用法について紹介する。ジュズダマ属の種子がビーズになる理由は，植物の性質，つまり種子の殻が頑丈で，最初から穴が開いた構造になっていて糸を通すことができ，形や色，サイズにバリエーションがあることによる。形については，ジュズダマはさきのとがった楕円形，モニリファ変種とプエラルム種はやや扁平な球形，ステノカルパ変種はびん形あるいは円筒形をしている。色には白色，ベージュ色，茶色，灰色があり，それぞれに濃淡やまだらも観察される。

もっとも基本的な種子ビーズの使い方は，子どもがおもちゃにするというものである。身近な環境に生育するジュズダマの野生集団から種子を集め，首飾りなどをつくって遊ぶ。いっぽう大人は，宗教，儀礼，呪術に用いる場合と，身体装飾に用いる場合とがある。

1．宗教，儀礼，呪術

事例1-1　仏具－シャンなど

上座仏教の宗教実践のひとつとして，シャン（Shan）人がジュズダマの種子で仏具を作る。たとえば，パゴダ型の飾り，旗，傘，造花，「金樹，銀樹（樹木を模した供え物）」をつくって寺に奉納する。あるいは108個つなげて数珠をつくる。その理由について「種子がかたくて割れにくいので，丈夫で長生きができるようにとの意味をこめてつくる」「白い種子は海から遠い場所に住む自分たちにとっての真珠である。材質がかたいことから心身の健康を，宝物を意味

することから仕事運や金運の上昇を，水の近くの冷たい場所に生えることから平和や安寧を祈願してつける」などと説明される。さらにラー（La），ビルマ（Burma），パラウン（Palaung），ダヌ（Danu）といった人々もジュズダマやモニリファ変種の種子で数珠をつくる。

事例1–2　ショルダーバッグ－ツァイワ

ツァイワ（Zaiwa）女性は，白いステノカルパ変種の種子を男性用のショルダーバッグに縫いとめ，男性を夫と認めた印として結婚式当日に渡す。結婚後男性は盛装するときにこれを使う。

事例1–3　帽子－ファラム・チン

ファラム・チン（Falam Chin）女性は，祭りや結婚式などのとき，ジュズダマの種子をすだれ状にたらした帽子をかぶる。

事例1–4　装飾品－ナガ

ナガ（Naga）系住民の男性の祭りの盛装として，タンクル（Tangkhul）は白いステノカルパ変種の種子を飾った帽子をかぶる。ロンブリ（Longpfuri）は上半身に二枚の赤い布をたすきのように交差してかけ，そこに白いジュズダマ，ステノカルパ変種の種子を縫いとめる。マクリ（Makuri）は幅の広いベルトに白いジュズダマあるいはステノカルパ変種の種子を飾る。また，ブランケットに白いジュズダマの種子を輪のような形に配置して縫いとめる。

事例1–5　子どもの成長と関連した呪術

種子で首飾りを作って，子どもにつけさせる。その意味は，「早く大きくなるように（ムン（Mun）・チン）」「悪い精霊がとりついて病気にならないように（パラ（Para）・ナガ）」「よだれをとめるために（ムン・チン，パラ・ナガ）」「丈夫になるように（ダヌ）」「健康を祈って（パオ（Pao）」などと説明される。

事例1–6　安楽死に導く呪術－パラ・ナガ

安らかな臨終をむかえられずに苦しんでいる病人がいたら，ジュズダマの種子を庭にまくと，「あの世にいくための道」ができて，苦しみから救うことができる。

2．身体装飾

事例2–1　ヘッドドレスなど

パラウンのヘッドドレスやパオのターバンにステノカルパ変種の種子を縫いとめる。

事例2–2　衣服

カレン（Karen）人はブラウス，タウンヨウ（Taungyo）人はワンピースに白いステノカルパ変種の種子を直接縫いとめる。コキ（Koki）・ナガ人はブランケットにジュズダマの種子を房状にしてたらす。

事例2-3　アクセサリー

チン人はおもにジュズダマで首飾りをつくる。ラター（Latha）人はモニリファ変種とプエラルム種の白い種子を額や腰に飾る。エン（Eng）人はジュズダマとステノカルパ変種でネックレスや耳飾りを作る。

ここまではすべて女性による利用の事例である。

事例2-4　バッグ

ティンナイ・ジンポー（Htingnai Jingpo）人がステノカルパ変種とプエラルム種の種子を，ワ（Wa）人，カチン（Kachin）人，シャン人がステノカルパ変種をそれぞれバッグにかざる。バッグの場合，男女ともに使用することがある。

事例2-5　全身を飾る

アカ（Akha）女性はアクセサリー，ヘッドドレス，バッグ，ベルト，上着，脚絆にジュズダマ，モニリファ変種，ステノカルパ変種，プエラルム種の種子を飾る。その種子の色，形，大きさに多様なものが認められる。

V　変化の諸相

1．手がかりとしての3者

IV章でのべたジュズダマ属種子ビーズの利用では，もともと同じ人物，もしくは同一世帯の成員が植物から種子へ，種子からものへの一連のプロセスをすべて担いつつ，実践が継承されてきたと考えられる。ところが現地調査では，これに一致しない事例がいくつも見つかった。そこで，その実態を分析するために，プロセスにかかわる3者の立場を設定する。種子の入手者，ものの製作者，そしてものの所有者である。種子の入手者はジュズダマ属を採集あるいは栽培して種子を入手する。ものの製作者は種子を素材にさまざまなものをつくる。ものの所有者はできあがったものを入手し使用する。3者が同一の人物あるいは同一世帯の成員から分離していく動きを追うことで，変化の諸相とその背景を検証していきたい。

2．継承される利用

2-1　活発な利用

表2には，住民が自ら種子を入手し，製作し，所有していたものを資料として譲りうけた例を示した。ジュズダマ属植物に関する知識や経験を語ってくれる人は多いが，その実践をもので確認できる例は比較的少ない。

そのなかにあって，もっとも活発に種子ビーズが利用されていた事例を紹介したい。1例目は儀礼に関して，サガイン管区レシーで「ナガ・ニューイヤー・フェスティバル」に参加した

表 2　もの資料 1―継承される利用法

資料番号	収集日	収集地	製作者	品名	植物の種類*			
					L	M	S	P
宗教，儀礼，呪術								
1-1	060113	サガイン管区レシー	ナガ	首飾り	＋			
1-2	060113	サガイン管区レシー	ナガ	腕輪	＋			
1-3	060113	サガイン管区レシー	ナガ	首飾り	＋			
1-4	060115	サガイン管区レシー	ナガ	首飾り	＋			
1-5	060116	サガイン管区レシー	ナガ	首飾り			＋	
1-6	060116	サガイン管区レシー	ナガ	首飾り	＋			
1-7	010308	シャン州クッカイ	パラウン	数珠	＋	＋		
1-8	050223	シャン州タチレク	シャン	旗				
1-9	050223	シャン州タチレク	シャン	旗	＋			
1-10	061126	シャン州チェントン	タイ・マオ	旗	＋			
1-11	061126	シャン州チェントン	タイ・マオ	旗	＋			
1-12	061126	シャン州チェントン	タイ・マオ	旗	＋	＋		＋
1-13	061126	シャン州チェントン	タイ・マオ	旗	＋	＋		
1-14	061126	シャン州チェントン	タイ・マオ	傘	＋			＋
1-15	061126	シャン州チェントン	タイ・マオ	傘	＋			＋
身体装飾								
1-16	021231	バゴー管区タウングー	カレン	ブラウス			＋	
1-17	021231	バゴー管区タウングー	カレン	ブラウス			＋	
1-18	021231	バゴー管区タウングー	カレン	ブラウス			＋	
1-19	061123	シャン州チェントン	ワ	バッグ			＋	
1-20	061120	シャン州チェントン	アカ	上着		＋		
1-21	060114	サガイン管区レシー	コキ・ナガ	ブランケット	＋			
1-22	031227	シャン州ラショウ	パラウン	ヘッドドレス			＋	
1-23	061120	シャン州チェントン	ワ	バッグ			＋	
1-24	031229	シャン州ムセー	カチン	バッグ			＋	
1-25	061127	シャン州カロー	ラター	首飾りの一部				＋

*L: ジュズダマ，M: モニリファ変種，S: ステノカルパ変種，P: プエラルム種

ナガ住民たちによる実践である。この祭りの儀礼や芸能に参加する人々は，タンクル，マクリ，ロンブリといったグループそれぞれに特徴ある装飾品や衣服，ブランケットを身に着けていた。その装飾品に動物の牙や皮，毛，羽毛，金属などの多種類の素材とともに，種子ビーズが使われていた。また祭りを見物する子どもたちは，呪術に関係した首飾りや腕輪（資料1-1～6）をはめていた。ナガが種子ビーズを頻繁に使うことは Jacobs［1990］や Stirn and van Ham［2003］にも紹介されているが，その実践が続いているのである。さらに装飾品の場合，所有者の男性は，種子の選び方やつけ方に独自のルールがあること，またそのようにして使うことで，団結心や心の清らかさ（タンクル，マクリ），勇ましさ（ロンブリ，マクリ）といった「わたしたち」グループの価値観を表現していることを明確に説明する。

2 例目は身体装飾にかかわるカレン女性の実践である。バゴー管区オクトウィンの S 村で

は，多くの女性が大量のステノカルパ変種の種子をブラウスに縫いとめ（資料1-16～18），赤いスカートとセットで日常着として着用していた［Ochiai 2004］。しかも，ひとつの世帯に長さや色の異なる複数の種類の種子が保管され，刺繍と組み合わせてさまざまなデザインの模様が描き出される。速水［2007: 179］は北タイ山地のカレンの既婚女性がブラウスとスカートを着用する姿について「身をもってカレンの伝統を体現し」「自ら未婚・既婚のステータスの違いの表象をも身にまとう」ことを指摘している。つまり，カレンである「わたしたち」，結婚して母となる「わたしたち」の表象が衣服全体であるとすれば，「わたしたち」の範疇を超えない範囲で「わたし」の裁量にゆだねられている部分，「わたし」のセンスや技術を発揮する部分がブラウスの模様であり，その表現に種子ビーズが用いられる。女性のひとりは「模様のデザインを考えているときがいちばん楽しい」とのべている。

そのほかにも，種子ビーズで身体装飾に関する実践を続けている人からは，「飾るときれいだし，祖父や父も続けてきた伝統だから」（ワ，資料1-19），「新年の行事や祭りのとき（種子を飾った上着を）着る。種子を飾ると美しい」（アカ，資料1-20）など，「わたしたち」の伝統と「わたし」の美意識が語られる。ここで注意したいのは，ジュズダマ属の種子ビーズを飾ること自体が，「わたしたち」らしさを表すのに必要不可欠な要素だとは考えられていない点である。利用法をそのまま継承するか，あるいは変更を加えるかは「わたし」の判断にゆだねられている。

2-2　種子を入手し続けるための努力

植物から種子へ，種子からものへの一連のプロセスの発端には，生き物としてのジュズダマ属がある。植物としての生存を確保し種子を手に入れるため，ものの製作者はさまざまな努力を払う。

植物を採集してきた人たちは，野生集団から離れると実践を継続できなくなる。生まれ育ったシャン州ナムカムで仏具を製作していたシャン女性は，カチン州バモーに移住後もこれを続けるため，種子を持って行って水のあるところにまいたという。ジュズダマの種子を集めてブランケット（資料1-21）を飾ったコキ・ナガ女性は，野生集団の生えていない場所に最近引っ越したばかりであったため，あらたに栽培を試みようと種子を保管していた。

植物を栽培してきた人たちは，栽培をやめたら種子を入手することができなくなる。このため，やむをえず栽培ができなくなっても，栽培している知人から種子を譲りうける（パラウン，資料1-22，ワ，資料1-23），以前栽培して収穫した種子をストックしている（カチン，資料1-24），ストックがなくなったら古い衣服から種子を取り外して再利用する（タウンヨウ）といった対策をとって製作を続けている。

2-3　種子から人工素材へ

ビーズは使い続けているものの，その素材が種子から人工物へと置き換えられる場合がある。シャン州における仏具づくりの場合，実際に種子が使われているもの（資料1-7～9）はきわめてまれで，市場で販売されたり，寺院に奉納されたりしている仏具には，プラスティックの代用品が用いられていることが多い（写真1）。このため，過去につくった経験があるという仏具師に依頼して，種子を使った旗（資料1-10～13）や傘（資料1-14，15）を再現した。

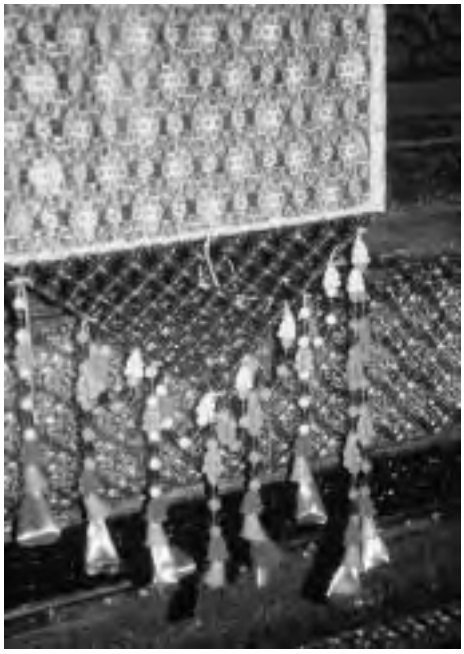


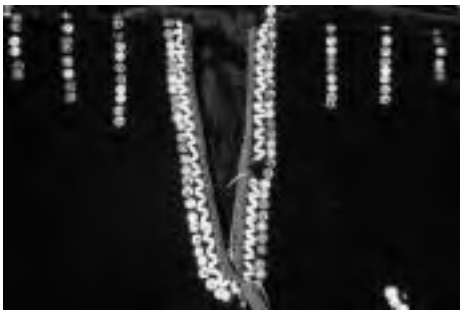
写真1　寺院に奉納された仏具

シャン州チェントンのアカによる身体装飾の事例では，女性が身に着けているものの装飾素材のほとんどがプラスティック・ビーズに置き換わっている。その理由について女性たちは，「買うだけで簡単に手に入るから便利」「種子を使っていると貧乏人だと思われる」「（年老いて目がわるくなったので）種子に糸を通すのが難しくなったが，プラスティック・ビーズならできる」「赤や黄色などきれいな色を使ってみたい」などと語る。つまり，「わたし」が使うものであるがゆえに，「わたし」の関心や事情が素材を変化させているのである。彼女たちの需要を満たすべく，チェントンの市場には装飾用素材を販売する店が3軒ある。

「わたし」の判断と「わたしたち」の判断の食い違いが，素材に反映するケースもある。シャン州カローのY村でタウンヨウ人の村長の家に保管されていた3枚のワンピース（写真2）について特徴を比較した。白いステノカルパ変種の種子だけで飾ったA，種子とスパンコールとビーズで飾ったB，スパンコールとビーズで飾ったCである。村長とその娘は，Aはこの村で作った「本物」，Bは村で作った「本物」をピンダヤーのタウンヨウ協会に貸したら勝手にスパンコールやビーズをつけて返されたもの，Cは同じくピンダヤーでつくられた「偽物」ととらえている。娘はヤンゴンに行き，Cを着て連邦の日（2月12日）の行事に参加した経験があり，その記念写真を持っていた。おなじタウンヨウであっても，個人レベルでは民族衣装はAだが，タウンヨウ協会という組織レベルの判断では，伝統を判断する根拠であった種子ビーズが否定され，人工素材でBやCが製作される。これは，他の少数民族と比較される場に立つと，制服としての「民族衣装」に見栄えや統一感が求められるためと考えられる。連邦の日に何を着て「わたしたち」の存在を主張するか，それを誰が決定するのかが，民族衣装に大きく影響している。

A

B



C

写真2　タウンヨウのワンピース（A，B，C）

2-4　利用の中断

種子ビーズの利用自体をやめてしまう場合もある。カチン州ミッチーナやバモーでは，植物やもの資料を見ることが非常に難しかった。これは，聞き取りをおこなったカチン系住民の大半がKIA（Kachin Independent Army）と政府軍の内戦の影響で，山地から低地に移住してきたことによる。つまり，山地の村にはジュズダマやステノカルパ変種が生えている場所があったが，現在の居住地では手に入らないという生育地へのアクセスの問題，転々と移住をくりかえす過程で種子や種子を飾ったものを失ってしまう継承の問題，この両方が生じているのである。また，種子が失われても，その痕跡がものにとどめられていることもある。シャン州ムセー，クッカイ在住のカチンには，ステノカルパ変種の種子を縫いとめる場所に種子ビーズとよく似た白い模様を織りこんだバッグを持つ人がいた。

シャン州南部のパオの場合，女性の大部分はオレンジ色のタオル地のターバンを頭に巻き，黒いブラウスとパンツのスーツを着用している。例えば2003年12月シャン州タウンジー郊外にあるカックー寺院を訪れた際，パオの公式ガイドはこのような服装をしていた。ところがこのタオル地ターバン以前に白いステノカルパ変種を縫いとめた黒い絹のターバンが使用されていたことが，90歳台の女性の証言によって確かめられた。現在では，絹のターバンともども種子ビーズを縫いとめるという利用法が失われ，その事実や巻き方を知っている人もごくわずかになっている。

3．ものの商品化

種子ビーズをめぐる利用のプロセスは，自分で使うものを自分でつくる形態から，自分でつくったものを他人が所有するという形態へと変化をとげつつある。ここでは，種子を入手する

者，ものをつくる者とものを所有する者とが分離している。もともと儀礼や身体装飾に使われてきたものが，観光産業と関連しつつ，少数民族のハンディクラフトというカテゴリーの商品へ変換され，売買の対象になったのである（表３）。種子ビーズを使った商品の販売形態には，観光地における売り手と買い手双方の動向が大きくかかわっている。

表３　もの資料 2―ものの商品化

	資料番号	収集日	品名	植物の種類* L	M	S	P
ヤンゴン小売店 A	2–1	040304	スカート	+			
	2–2	060118	スカート			+	
	2–3	050311	スカート				+
	2–4	050311	上着			+	
	2–5	050216	首飾り			+	
	2–6	060118	かんざし	+			
	2–7	061203	首飾り	+			
ヤンゴン小売店 B	2–8	050311	ブランケット	+			
マンダレー小売店 C	2–9	060110	帽子	+			
マンダレー小売店 D	2–10	060110	首飾り			+	
マンダレーマハムニ仏参道小売店	2–11	031225	数珠	+			
	2–12	031225	数珠	+			
	2–13	060111	数珠	+			
	2–14	060111	数珠	+			
	2–15	060111	数珠	+			
シャン州タウンジー	2–16	061130	首飾り	+			
シャン州ニャウンシュエ	2–17	060301	ターバン			+	
カチン州ミッチーナ	2–18	050303	バッグ			+	+
サガイン管区レシー	2–19	060113	首飾り	+			
シャン州チェントン仲介業者 A（次行に続く）	2–20	031214	上着			+	+
	2–21	031214	脚絆				+
	2–22	031214	脚絆		+		
	2–23	061120	ヘッドドレス	+	+	+	+
	2–24	061120	ヘッドドレス	+	+	+	+
	2–25	061120	ヘッドドレス	+	+	+	+
	2–26	061120	小物入れ	+			
	2–27	061120	ブラウス		+	+	
	2–28	050224	上着		+		
	2–29	050224	バッグ		+	+	
	2–30	050224	首飾り		+		
シャン州チェントン仲介業者 A（続き）	2–31	050224	首飾り		+		
	2–32	050224	首飾り		+		
	2–33	050224	首飾り		+		
	2–34	050224	首飾り		+		
	2–35	050224	首飾り		+		
	2–36	050224	ヘッドドレス	+	+	+	+
	2–37	050224	ヘッドドレス	+	+	+	
	2–38	031213	ヘッドドレス	+	+	+	+
	2–39	050224	上着				+
シャン州チェントン H 村での直接販売	2–40	041214	上着				+
	2–41	041214	エプロン	+		+	+
	2–42	041214	ヘッドドレス	+			+
	2–43	061121	ヘッドドレス		+		+
	2–44	061121	ヘッドドレス			+	+
	2–45	061121	上着	+			+
	2–46	061121	バッグ	+	+		
	2–47	061121	脚絆				+
シャン州チェントン P 村での直接販売	2–48	061118	ヘッドドレス			+	
	2–49	061118	首飾り			+	
	2–50	061118	首飾り	+	+	+	
	2–51	061118	ショール	+			
	2–52	061118	バッグ	+		+	
	2–53	061118	首飾り	+		+	
	2–54	061118	首飾り	+	+	+	
	2–55	061118	首飾り	+	+	+	
	2–56	061118	首飾り	+	+	+	+
	2–57	061118	腕輪			+	
	2–58	061118	首飾り	+	+		+
	2–59	061122	腕輪		+		
	2–60	061122	首飾り		+		
	2–61	061122	バッグ	+			
	2–62	061122	腕輪			+	+
	2–63	061122	ブラウス		+		
	2–64	061122	上着		+		
	2–65	061122	ペットボトルケース	+	+		

*L: ジュズダマ，M: モニリファ変種，S: ステノカルパ変種，P: プエラルム種

3-1　アンティークの間接売買

まず，都市での間接売買の例をあげる。多民族国家ミャンマーを訪れる外国人観光客にとって，少数民族はひとつの観光のターゲットである。マンダレーやヤンゴンといった主要都市の市場，小売店などでは恒常的に少数民族のハンディクラフト，とくに使用済みのアンティークが販売され，そのなかに種子ビーズを使ったものが見つかることがある。この場合専門の業者によって，種子を入手しものを製作する者とものを購入し所有する者とが仲介される。例えばヤンゴン市内の小売店Aではチンなどの衣服（資料2-1～4）を，マンダレー市内の小売店Cではチンの帽子（資料2-9）を購入した。このような店でとくに目立つのはナガのハンディクラフトとよばれる商品群（資料2-5～8, 10）で，種子ビーズがひんぱんに用いられている。

つぎに地方におけるアンティークの売買について，3つの町を紹介する。シャン州ニャウンシュエはインレー湖畔にリゾートホテルが立ち並ぶ主要な観光地で，ここではパオの絹製ターバン（資料2-17）を購入した。また，テーマパーク「少数民族村」で，民族衣装を着て観光客と対面する仕事をするラター女性から，アクセサリーの一部（資料1-25）を譲り受けた。もの自体が売買されていたわけではないが，民族衣装を着た女性が見世物として商品化されている例である。カチン州ミッチーナでは仲買業者からティンナイ・ジンポーのバッグ（資料2-18）を，サガイン管区レシーでは祭り見物を企画した旅行業者からナガの首飾り（資料2-19）をそれぞれ購入した。

いっぽう，シャン州チェントンではアカによってものが商品化されていた。その第一の販売形態は，アカ女性Aとその家族による仲介業である。A一家はチェントン周辺のアカ集落からおもにアンティークの衣服やヘッドドレス，バッグなどを仕入れ，チェントン市内の小売店で販売するほか，タイ国チェンマイへも出荷している。そのなかには多数の種子ビーズを使った商品がある（資料2-20～39）。この場合，ものを所有していても販売の機会がない集落の住民と，ハンディクラフトを求める観光客を，Aが仲介している点に特徴がある。また，A自身がアカであることと，深く関係していると思われるふるまいにも注意したい。例えば，新しい商品の製作を依頼することもあるが，その場合でも「よいものができるまで何年でも待つ」といった姿勢を示す。これによって商品の質を維持し，模倣品との差別化を図っている。また，かならずしも利潤追求だけを目的に商売をしているわけではないことを語る。「現金を急に必要としている人がものを持ち込んできたら，事情を察して高く買い取る」や「村の娘を社会勉強と行儀見習いのため自宅に住まわせる」など，ものの製作者である住民に対して福祉的な貢献をしているという。

3-2　製品の直接販売

シャン州チェントンにおける第二の販売形態では，種子を入手しものを製作した当事者が，

写真 3　ハンディクラフトの直接販売

そのものを自分の住む集落を訪れた欧米人観光客に直接販売している。その実例はＨ村とＰ村（写真３）で観察した。

両村で販売しているものの大部分はアンティークではなく，販売を意識して製作した衣服やアクセサリー（資料2–40〜64）である。基本的に「わたし」のものの延長線上にあり，自分たちで使うこともできる。しかしペットボトルをいれるケース（資料2–65）のように，観光客による用途を意識したものもある。売買が成立すれば，住民が種子を入手し製作したものを観光客が所有することになるが，製作者と所有者のあいだに仲介業者は介在しない。ただし，ライセンスをもった観光ガイドが「文化の仲介者」［豊田 1996: 133］として活躍していることを見落としてはならない。

村を直接訪問し，場合によってはトレッキングもするという観光形態は，1993 年にチェントンが外国人に解放された後，チェントンのガイドがチェンマイからノウハウを移入して始めたものである。ガイドによれば，すでに開発が進んだ北タイでは満足しなくなった観光客が，より素朴な村を求めてチェントンに移動してきているという。ガイドによる観光ルート開発の過程で，Ｈ村，Ｐ村がその一部に組み込まれ，不定期ながらも観光客が訪れるようになったことで製品の直接販売が可能になった。とくにＰ村では，2003 年に筆者の通訳をしたガイドが種子ビーズの文化的価値を理解し，その内容を観光客に伝えた結果，にわかに製品への需要が高まり，2006 年には村のあちこちでジュズダマ属が栽培され，種子ビーズを飾った製品が売られるようになった［落合 2007c］。伝統文化をもとめる観光客の期待と研究者の意見をガイドが仲介し，ものの商品化を一気に拡大させたのである。

3-3　寺院参拝みやげ

少数民族観光とは別個に，有名寺院への参拝みやげに種子ビーズ商品がつくられている可能性がある。マンダレーのマハムニ仏の門前では，露天商や仏具店でジュズダマ種子の数珠が販売されていた（資料2-11〜15）。モン州チャイティーオーで，「ジュズダマの首飾り（資料2-16）を買った」（シャン人女性），「ジュズダマの種子を編みこんだかごを売っていたのを見た」（ビルマ人女性）という話を聞いた。

4．創出される利用法と種子の商品化

前節では，継承されてきた利用法に即して製作されたものが商品となる事例をみてきた。ところが，継承の経験がほとんどない人たちが，あらたに種子ビーズを使ってものを製作し，商品として販売する事例（表4）が生まれている。これはおもに専門のアパレル業者がおこなっ

表4　もの資料 3―創出される利用法と種子の商品化

	資料番号	収集日	品名	植物の種類*			
				L	M	S	P
シャン州タウンジー小売店A	3-1	031220	バッグ	＋		＋	
	3-2	050218	スカート	＋		＋	
	3-3	050218	ブラウス	＋		＋	
	3-4	031220	ショール			＋	
	3-5	031220	バッグ			＋	
	3-6	031220	バッグ	＋		＋	
	3-7	031220	ブラウス	＋		＋	
	3-8	031220	パンツ	＋		＋	
	3-9	060101	バッグ	＋		＋	
	3-10	060101	首飾り	＋			
	3-11	061130	首飾り	＋			
	3-12	061201	帽子	＋			
	3-13	061201	帽子	＋			
	3-14	061201	ブラウス	＋			
	3-15	061201	ブラウス			＋	
	3-16	061201	スカート	＋		＋	
	3-17	061201	ブラウス	＋		＋	＋
	3-18	061201	ブラウス				
	3-19	061201	スカート	＋			
	3-22	061203	バッグ			＋	
	3-23	061203	バッグ	＋		＋	
シャン州タウンジー小売店B	3-24	061221	スーツ	＋			
シャン州タチレク小売店C	3-25	050222	スカート			＋	
	3-26	050222	スカート				＋
シャン州タチレク小売店D	3-27	050222	バッグ			＋	
	3-28	050222	バッグ			＋	
シャン州タチレク小売店E	3-29	050222	バッグ	＋			
ヤンゴン小売店F	3-30	040304	スカート			＋	
タウンジー	3-31	061201	バッグ	＋			

*L: ジュズダマ，M: モニリファ変種，S: ステノカルパ変種，P: プエラルム種

写真 4　種子ビーズを飾った衣服の販売

ており，業者むけに種子を生産し，販売する人も現れている。つまり種子を入手する者，ものを製作する者，ものを所有する者が完全に分離すると同時に，素材である種子さえもが商品化され，売買の対象となったのである。シャン州南部，東部の事例を紹介する。

種子ビーズ商品を小売する店は，タウンジーで 2 軒，タチレクで 3 軒みつかった。前者のひとつ，シャン女性が経営する小売店 A（写真 4 ）では，タチレクの業者から仕入れたジュズダマやステノカルパ変種の種子で，ブラウス，スカートなどの衣服や，肩掛け布，バッグなどの小物を装飾し販売していた（資料3–1〜23）。衣服や小物はシャンの伝統とされるデザインや素材を踏襲している。経営者によればタイ国で出版されたスタイルブックに触発され，種子ビーズを飾った衣服や小物をデザインし，製作したという。製品の販売先は 2006 年現在，地元タウンジーからニャウンシュエ，ナムカム，ムセー，ラショウ（以上シャン州）やマンダレー，ヤンゴンにまで拡大し，各地で好評を得ている。別の小売店 B では，スーツ（資料3–24）などの衣服を販売していた。

いっぽう，タチレクで小売店 C を営むビルマ人男性は，アカから買い取った種子をスカート（資料3–25，26）に縫いとめて売っている。プラスティック・ビーズを飾った服よりも高く売れるという。そのとき，ミャンマーの布を使って，ミャンマーで製造しつつも「タイ製」のタグをつけておく。販売先はヤンゴンのほか，チェンマイ，バンコク，プーケット，そしてラオスである。シンガポール人が買いつけにくることもある。別の小売店 D や E では，バッグ（資料3–27〜29）を販売していた。

種子ビーズ商品の販売には，タイ国での状況が大きく反映している。小売店 A の経営者が話していたスタイルブックをバンコクの書店で探してみたところ，*Phai Thai: Collection of Modern Thai Dresses in Thai Silks or Thai Fabrics* の 9 号［Fashion Review 2003a］と 10 号

［Fashion Review 2003b］および *Thai Silk Collection*［Deluxe Fashion 2003］の3冊を購入することができた。この本にはタイ国で生産された絹や木綿の生地を使った高級婦人服がカラー写真で紹介されており，そこにジュズダマとステノカルパ変種の種子あるいはプラスティック・ビーズや金属片を飾った衣装が含まれることを確認した。このスタイルブックには「微笑みの国の芸術と文化」「タイの文化保存にたいする誇りと賞賛」といったサブタイトルがつけられ，タイ国の伝統的な染織や工芸技術を現代的な服装にアレンジし，その価値を再評価しようという意図を打ち出している。その中にあって種子ビーズは，北タイや山地民のイメージを表す自然素材として使用されている。

また2003年から2007年にかけてチェンマイ，チェンライ，バンコク，ラオスのヴィエンチャンやルアンパバーンで衣料店やショッピングセンターをまわったところ，種子ビーズを飾った衣服やバッグ，雑貨が多数販売されている様子が確認できた。一般の商品としてだけでなく，一村一品（OTOP）運動やシリキット王妃によるプロジェクトの産品としても販売されている［落合 2007b］。またヤンゴンのアウンサン・マーケットでジュズダマの種子を飾ったスカート（資料3–30）を購入したとき，売り場の女性はこの商品がタイ国の最新ファッションであることをセールスポイントにしていた。つまり，タイ国で種子ビーズを利用した商品が開発され始めたとき，それに反応したシャン州の人々によって同様の商品が生産され，そしてミャンマー，タイ，ラオスの3国を巻き込むような流行へと広まっていったのであろう。ここで注目すべきは，種子ビーズ商品が外国人観光客むけにではなく，むしろ地元のマジョリティであるタイ人，シャン人，ビルマ人，ラオ人を対象に，女性たちのおしゃれ着として販売されている点である。つまり，おなじ種子ビーズを使いながらも，さきにのべた少数民族の文化に依拠したものとはまったく異なる商品化の流れが見てとれるのである。

では，このような商品製作の素材となる種子をアパレル業者はどのように手にいれるのか。その供給地のひとつとして，シャン州チェントンのK村をみつけた。この村の複数の住民がジュズダマ属を栽培し，収穫した種子を販売している。そのうちのひとりの男性は次のように語る。2002年頃から近隣の村やタチレクのアカが種子を買いに来るようになったので，両親の時代からうけついできた種子を殖やして売っている（写真5）。タチレクに出稼ぎに行っている親族がいて，人づてに業者がこの村を知ることになったのだそうだ。売値は，空き缶（200 ml程度）1杯で，ステノカルパ変種は300チャット，他の種類は200チャットである（調査時のレートで100チャットはおよそ10円）。ひとりが買う量はこの缶5，6杯から，大きな空き缶（900 ml程度）6，7杯までと幅がある。自分で何かものをつくるという人と，転売するという人がいる。

さらに，種子の生産者とアパレル業者を仲介するタチレクのシャン業者Mに話を聞いた。Mは先にあげたタウンジーの小売店Aに種子を供給している。Mは次のように語る。1998年頃

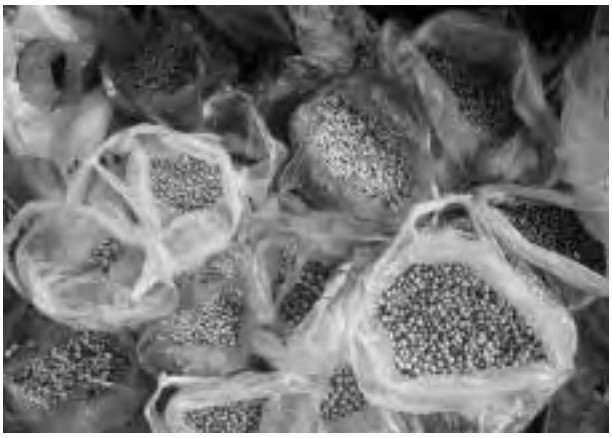


写真 5　生産され出荷される種子

からジュズダマ属の種子を扱うようになった。種子は，タイ国側のアカやラフ（Lahu）が直接売り込みに来る。チェンマイに商品を生産する人がいるので，そこに送るとよい商売になる。ただ最近では競合する業者が増えたので，売値を下げざるを得ない。

シャン州東部南部での商品化の動きには，みずからが種子ビーズ利用の継承者であったアカ人によるものと，そうではないシャン人やビルマ人によるものの二通りがある。両者によって扱われる製品は種類や購買対象者が異なっているが，アカが種子の生産者として取り込まれるなど，一部が絡み合いながら進行している。

5．ふたたび 3 者の融合

ジュズダマ属の種子ビーズをめぐる商品化の動きは，こうして，種子の入手者，ものの製作者，ものの所有者を完全に切り離すところにまで至った。ところが，このような動きとはまったく独立して，あらたに植物から種子へ，種子からものへの一連のプロセスを実践する人が現れている。

シャン州タウンジー市内で理髪店を経営するパオ男性とその妻は，店内の仏壇にジュズダマ種子をつなげた飾りを飾っていた（写真 6）。パオ語の呼称も伝統的な利用法も教えられたことはないが，たまたま家の近くに生えてきた植物の種子を見たら糸を通せることがわかったので，仏壇を飾ったという。この例では，種子ビーズの利用が，継承されてきた系だけに限らないことをしめしている。「わたし」個人が種子の特

写真 6　種子で仏壇を飾る

徴を認め，そこからものをつくることを発想し，実践する。植物が生育しているかぎり，この一連のプロセスが今後も自然発生的に繰り返されうることが示唆される。

いっぽう，同じくタウンジー市内に住むシャン人大学生は手芸用品店で白いジュズダマの種子を買ってきて，自分の通学用バッグ（資料3–31）に縫いとめた。種子がきれいだったのでやってみたのだそうだ。種子の入手は購入という手段によっているが，それを使ってバッグをつくり自ら使う状況は，継承してきた人たちとなんら変わることはない。種子の美しさに目を留めた「わたし」の判断にもとづいて，利用が実践されている。

VI　お　わ　り　に

ジュズダマ属は，種子がビーズとして活用できるという有用性から判断して，生物資源のひとつにかぞえることもできる。だが，食料となって人にカロリーや栄養素をもたらす植物，薬品となって病気や怪我の治療に役立つ植物などと比べると，生物資源としてはかなり異質な存在であることがあきらかになる。つまり，利用と効果の対応関係がかならずしも明確でなく，人の生存を確保する上では必須ではない。さらに，種子ビーズが仮に失われたとしても，できあがったものの機能や意味が満たされなくなるといった事例は，今のところない。つまりジュズダマ属は，あれば使えるが，なくてもとりたてて困ることのない生物資源であり，生業全体のなかではきわめて微細な活動の範囲のなかに布置されるのである。

にもかかわらず，本稿で指摘したように，ジュズダマ属の種子ビーズはミャンマー周縁部の多くの少数民族によって広く利用され，その実践が共有されてきた。自分のものを自分でつくる人々は，「わたし」個人の視点から種子ビーズを飾ることに価値を見出し，生き物としてのジュズダマ属の生存を確保しつつ，利用を継続してきたのである。種子ビーズ利用のおもな対象となった衣服は，本来自らの身体を包み，保護するための役割を担う。しかし，人は単にこの機能を追及するにとどまらず，「わたしたち」内部にある立場や価値観を表現する手段，価値観の視覚的表現手段としても衣服を用いてきた。内海［1997: 196］は東南アジアにおける染織文化発展の理由を「染織品という美的価値の高い財貨をつくりだすこと自体が重要とされ」「美しい布を自分の身にまとって誇示したいという思いの結果」であると推測している。そのとき，衣服にアクセントをつける素材として用いられてきたのが，ジュズダマ属の種子ビーズであった。かたい種子のもつ独特の光沢や陶器のような質感，布から浮かび上がる立体感は，染織の技術では出しえない効果を衣服にもたらす。アクセサリーやバッグ，ヘッドドレスなどにも付加され，また宗教や儀礼，呪術における意味を支える根拠ともなった。

ところが，人とジュズダマ属のかかわりによって生み出されたものを収集してみると，その実践は決して固定されたものではなく，さまざまな方向へと変化をとげていることが示され

る。吉田［1999: 159］は，民族博物館における真正の民族誌資料の一般的な基準を「当の社会の成員の手で，当の社会で生み出された素材を用いて，当の社会の成員が使用するために作られ，しかも実際に使用されたもの」としている。表2，3，4に提示したもの資料121点のなかで，この基準に合致する資料は25点しかない。のこり96点は，偽物の民族誌資料として真正の民族誌資料から除外される「当の社会の成員が使おうと思えば使えるものでも，実際の使用痕のないもの」「外から来た者のために作ったもの」「当の社会の成員以外によって作られたもの」［同所］にあたる。だが，真正の民族誌資料の基準が前提としている「それを生み出す『当の社会』がそれだけで完結し，閉じた，変化のない社会だという考え方」［同所］からはずれた偽物のもの資料こそが，ミャンマーの少数民族社会が，けっしてそれだけで完結せず，外部からもたらされるものや情報によって変化し続けていることを如実に示しているのである。

その変化の方向のひとつは，植物素材の種子ビーズにかわる外来の人工素材のビーズの利用である。この地域にプラスティック・ビーズが流入したことにより，実践を継承してきた人びとが，種子ビーズを原型に新たな素材を活用してものをつくる行動をみせた。さらに衣服を取り巻く状況の変化がこれに連動する。「わたし」個人が日々を暮らす衣服は，時と場合によって「わたしたち」集団の民族衣装とみなされ，「わたしたち」を公の場で主張する手段となった。このときには，植物素材から人工素材への置き換えがさらに強化される傾向がある。その実例は，カチン州ミッチーナのカチン・マナウ公園集会所におけるカチン系民族集団のバッグ展示や，ヤンゴンの国立博物館の少数民族展示にも認められた。土着の素材でつくられた民族衣装を重要視する欧米人研究者の立場［Howard 1999; Dell and Dudley 2003］とかけ離れたこのような行動には，たんに種子ビーズを使うか否かにとどまらず，あえて土着の素材を否定し人工素材で民族衣装を構成しようとする「わたしたち」の意志がみてとれるのである。

もうひとつの変化の方向は，ものと種子の商品化である。ジュズダマのような微細な生物資源でさえ商品におきかえられ，マーケットに組み込まれたのである。その結果，種子ビーズ利用のプロセスは個人あるいは世帯で完結しえなくなり，種子の入手者，ものの製作者，ものの所有者の分離をまねいた。商品化の要因となったのは，「少数民族」に対する他者の視点である。まず，域外から訪れる欧米人観光客は，「わたしたち」が否定した植物素材のジュズダマ属にオルタナティブな価値を見出した。ビーズが種子であることが，天然素材による手作りの「エスニックアイテム」「エコアイテム」となったのだ。それはものを商品として購入するという行動を導き，ものや種子が市場性を獲得する道筋を開いた。さらに，この地域内には少数民族ではないタイ系住民という他者も存在する。タイ系住民は少数民族の有用植物に欧米人観光客と同じ価値を追認した。そして，少数民族と「わたしたち」がともに居住する地域のイメージを種子ビーズによって表現したアパレル商品を生産した。このような現象はミャンマーやタイ国にかぎったことではない。瀬川［2003: 165］は，中国雲南省のペー族の事例として，西洋

的工業製品に対して絶対的に負に位置づけられてきた「土産品」が，エスニック観光を通じて漢族や西洋人の珍重する価値へと変身することを報告している。

ものと種子の商品化をささえた背景に，シャン州南部東部の特性があることを指摘したい。まず素材となる種子ビーズの供給について，これだけ多様な形態的特徴をそなえた種子を一挙に入手することのできる地域は，植物の分布域上きわめてまれである。アカを中心とした少数民族が2種3変種にわたるジュズダマ属を栽培して種子を入手し，ものを飾ってきた経緯があったからこそ種子が生産され，業者が種子を入手できるのである。つぎに商品の売買について，タウンジー，チェントンから，タチレクとメーサイを経てチェンマイへと至る，国境をまたいだ流通経路があることに注目したい。チェンマイは観光客の動向やそれにたいする対応，商品の開発など観光産業全体にかかわる情報の発信地として，またものの販売先として，重要な位置を占めている。国境の町タチレクとメーサイは中継地点として機能し，バンコクやプーケットなど国内の諸都市だけでなく，外国にむけた流通の窓口にもなっている。

種子ビーズの国際的なマーケットについては，2004年12月におこなった台湾高雄市での現地調査でその一端があきらかになった。台湾原住民向けにハンディクラフト材料を販売する小売店でジュズダマとステノカルパ変種の種子が販売されていたので，経営者に聞いてみると，自らメーサイに出向いて買い付けたものであった。しかも，この店の顧客であるパイワン（Paiwan）人アパレル業者が種子を購入し，衣服に縫いとめて販売していた。彼女はプラスティック・ビーズや刺繍とともに種子を縫いとめたデザインによって，パイワンの伝統を表現したそうである。台湾の少数民族であるパイワンがミャンマーあるいはタイ国の少数民族が生産し，出荷した植物素材を用いて「わたしたち」を表現する背後には，それを支える流通のネットワークがある。周縁の少数民族といえども，ハンディクラフト製作にかかわるマーケットでは，ボーダーレス化が進んでいるのである。

今後，本稿で取り上げた少数民族が自らの植物利用の文化を相対化し，他者的な価値観から種子ビーズを再評価するのだろうか，さらには「わたしたち」意識を表現する手段としてジュズダマ属を積極的に活用しようとするのだろうか。ミャンマー，タイ国，ラオスを含めた東南アジア大陸部全体の動向を見届けつつ，種子を入手する者，ものを製作する者，ものを所有する者の関係性をさらに詳細に描き出すことが次の課題である。

謝　　辞

本稿の現地調査は，JICAミャンマーシードバンクプロジェクト短期専門家派遣，科学研究費補助金「ミャンマー北・東部跨境地域における生物資源利用とその変容（課題番号13575024）」および科学研究費補助金「ミャンマー少数民族地域における生態利用と世帯戦略――広域比較に向けて（課題番号16402003）」によって実施した。また，科学研究費補助金「有用植物の利用からみた東シナ海東部島嶼域の地域特性（課題番号15710184）」の成果の一部を記載した。聞き取りや資料提供に協力してくださったすべての人に，心から感謝します。

参 考 文 献

Arora, R. K. 1977. Job's-tears (*Coix lacryma-jobi*): A Minor Food and Fodder Crop of Northeastern India. *Economic Botany* 31: 358–366.

Bor, N. L. 1960. *The Grasses of Burma, Ceylon, India and Pakistan*. Oxford: Pergamon Press.

Dell, E.; and Dudley, S., eds. 2003. *Textiles from the Burma, Featuring the James Henry Green Collection*. London: Philip Wilson Publishers.

Deluxe Fashion. 2003. *Thai Silk Collection*. Deluxe Fashion.

Diran, K. D. 1999. *The Vanishing Tribes of Burma*. London: Seven Dials, Casell & Co.

Fashion Review. 2003a. *Phai Thai: Collection of Modern Thai Dresses in Thai Silks or Thai Fabrics*, vol. 9. Bangkok: Fashion Review.

————. 2003b. *Phai Thai: Collection of Modern Thai Dresses in Thai Silks or Thai Fabrics*, vol. 10. Bangkok: Fashion Review.

速水洋子. 2007.「北タイ山地の女性たち」『失われる文化・失われるアイデンティティ』綾部恒雄（監修・編），176–187 ページ所収. 東京：明石書店.

Howard, M. C. 1999. *Textiles of the Hill Tribes of Burma*. Bangkok: White Lotus.

Hutton, J. H. 1968. *The Sema Nagas*. Oxford: Oxford University Press.

————. 1969. *The Angami Nagas*. Oxford: Oxford University Press.

井上　真. 1999.「地域研究の方法序説 —— メタファーとしての総合格闘技」『エコソフィア』3 : 62–70.

Jacobs, J. 1990. *Tha Nagas: Hill Peoples of Northeast India*. London: Thames and Hudson.

Jain, S. K.; and Banerjee, D. K. 1974. Preliminary Observations on the Ethnobotany of the Genus Coix. *Economic Botany* 28: 38–42.

Koyama, T. 1987. *Grasses of Japan and Its Neighboring Regions: The Identification Manual*. Tokyo: Kodansha.

Mills, J. P. 1973. *The Lhota Nagas*. Bombay: Oxford University Press.

————. 1980. *The Rengma Nagas*. Spectrum Publications, Gauhati.

長田武正. 1973.『人里の植物　I』東京：保育社.

Ochiai, Y. 2004. Plants as the Basis for Material Culture: A Note on Job's Tears and the Karen People in Bago Yoma. In *Sustainable Forest Management and Indigenous Uses of Forest Resources in Myanmar*. Kyoto University, Japan and University of Forestry, Forest Department, Ministry of Forestry, Union of Myanmar.

落合雪野. 2007a.「種子を飾る人びと —— 植物利用からみたタイ文化圏」『自然と文化そしてことば』3 : 106–114.

————. 2007b.「飾る植物 —— 東南アジア大陸部山地における種子ビーズ利用の文化」『自然人類学 第 6 巻 —— 自然の資源化』松井健（編）. 東京：弘文堂.

————. 2007c.「ジュズダマ —— 観光資源の植物」月間みんぱく 31 (11): 20–21.

瀬川昌久. 2003.「中国南部におけるエスニック観光と『伝統文化』の再定義」『文化のディスプレイ —— 東北アジア諸社会における博物館，観光そして民族文化の再編』瀬川昌久（編）. 東京：風響社.

新谷忠彦. 1998.『黄金の四角地帯 —— シャン文化圏の歴史・言語・民族』東京：慶友社.

Stirn, A.; and van Ham, P. 2003. *The Hidden World of the Naga: Living Traditions in Northeast India and Burma*. London: Pastel Publishing.

豊田三佳. 1996.「観光と性 —— 北タイ山地の女性イメージ」『観光人類学』山下晋司（編）. 東京：新曜社.

内海涼子. 1997.「衣装」『事典東南アジア —— 風土・生態・環境』京都大学東南アジアセンター（編）. 東京：弘文堂.

Watt, G. 1904. *Coix* spp. or Job's Tears: A Review of All Available Information. *Agricultural Ledger* 13: 513–553.

吉田憲司. 1999.『「文化」の発見 —— 驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店.